

# 多度津町 若手職員ワーキング、懇談会 第10回 まねきねこ課会議報告書

- ◆日時 平成29年3月7日（火） 18:00～20:00
- ◆場所 多度津町役場
- ◆内容 外部講師による講演  
ウェアについて

## ◆プログラム

1. 開会
2. 講師の紹介
3. 講演「特産品開発や拠点づくりの考え方」
4. 質疑応答・意見交換
5. その他（ウェアについて）

平成29年3月17日

■参加団体・若手町職員一覧

	所属	参加人数	合計
懇談会	つながりプロジェクト	0	11名
	おいでまい町屋プロジェクト	2	
	たどつまち歩きの会	1	
	多度津さくら工房	1	
	多度津町観光協会	2	
	多度津商工会議所青年部	1	
	多度津町教育委員会	1	
	四国旅客鉄道株式会社多度津駅	1	
	金剛禅総本山少林寺	0	
	ナスタウン出版株式会社	0	
	株式会社 tao	0	
	中讃ケーブルビジョン株式会社	2	
若手町職員ワーキンググループ	政策企画課	3	18名
	産業課	2	
	総務課	2	
	教育課	3	
	町長公室	2	
	住民課	1	
	税務課	1	
	福祉保健課	1	
	建設課	1	
	環境課	1	
	上下水道課	1	

\* 順不同

## 第10回 会議の実施内容

### (1) 会議概略

#### ■全体の流れ

次 第	役割	実 施 項 目
<b>資料説明</b> <b>当日及び今後の進行説明</b> 18:00～18:10	事務局 JP 総研	・開会の挨拶 ・講師のご紹介 ・本日の流れについて
<b>講演</b> 18:10～19:15	講師	・特産品開発や拠点づくりの考え方として ⇒講義形式
<b>質疑</b> 19:15～19:30	講師 JP総研	・講演を受けて質疑 ⇒ジャパン総研が進行します。
<b>話し合い</b> 19:30～19:45	JP 総研	・講義を受けてグループでの話し合いを行います。
<b>その他</b> 19:45～20:00	JP総研 事務局	・ウェアについて

#### ■会議の目的

- 外部講師による講演会
- ウェアについての協議



## 第 10 回 会議まとめ

---

### (1) 講演「特産品開発や拠点づくりの考え方」

外部講師（有限会社フィールドワーク取締役社長 碓氏）を招き、広島県庄原市高野町にて、「道の駅たかの」開業を題材に、特産品開発や人材（スタッフ）育成などの事例並びにブランド戦略の実施事例として、長崎県平戸市での組織づくりや特産品開発の経緯を講演いただく。

消費者のライフスタイルの変化に伴う市場の変化に対応していくことが、今後の特産品開発には求められていることや、今後の観光のキーワードとして、「非日常」を感じられる資源の発掘が必要であることを講演いただき、多度津町の資源を活かした観光の可能性についてなど、幅広い話題となった。

#### ◆講師

#### 講師：碓孝洋氏

有限会社フィールドワーク取締役社長  
総務省地域力創造アドバイザー



1953年長崎県佐世保市生まれ。大学卒業後、長崎在籍 20 年の間、食料品バイヤーや大型中国料理店をはじめとした飲食業の立ち上げを行い、マーケティング会社などを経て 2006 年に独立。  
人材・食材・郷土文化等、地域資源に根ざした特産品開発を得意とし、地域の生産者がやる気を出して自ら取り組む六次産業化の実現にも力を注いでいる。  
また近年では、活動拠点を九州として、全国の道の駅や直売所等の施設施工・運営・リニューアルにおけるアドバイザーや、セミナー・勉強会の講師としても幅広く活動しているほか年間約 50~100 点の商品開発とそれに伴う流通開拓業務を行っている。  
市場について、商品デザインについてのスペシャリスト。

## (2) 講演を受けて質疑・意見交換

講演を受けての質疑応答を実施。

その後、講義を聞いて「実際に自分たちにもできること」「気付いたこと」について、グループで話し合い（意見交換）を実施。



## (3) ウェアについての協議

ウェアのサンプルをもとに、素材やカラーなどについて協議を行い、実際に作成する内容についてアンケート調査を実施した。



## 第 10 回会議 総括

---

### (1) 講演会の実施について

多度津の特産品であるトマトやオリーブ、牡蠣などは、既にブランド化や6次産業化が進んでいるが、商品を販売する拠点や生産性の確保など、今後検討が必要な課題もある。

講演内での地域の資源・人材を活かした事例は、今後のプロジェクト実施の際にも取り入れられることが多くある。

### (2) ウェアについての協議

ウェアは、4月1日「四国まんなか千年ものがたり」の多度津駅出発時にて、見送りを  
行う際にメンバーが着用予定。

プロモーションツールとしてウェアを着用することで、タウンプロモーションの一環としても活用できるため、期日までの完成を目指す。

